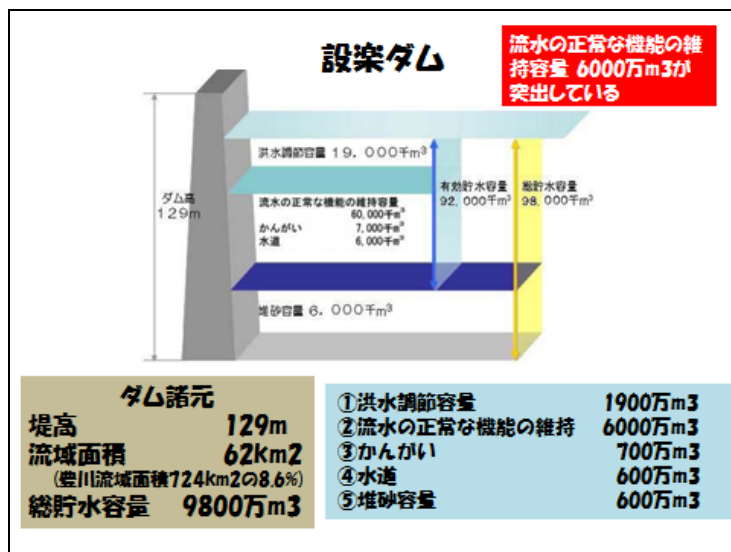




24 設楽ダムの容量配分

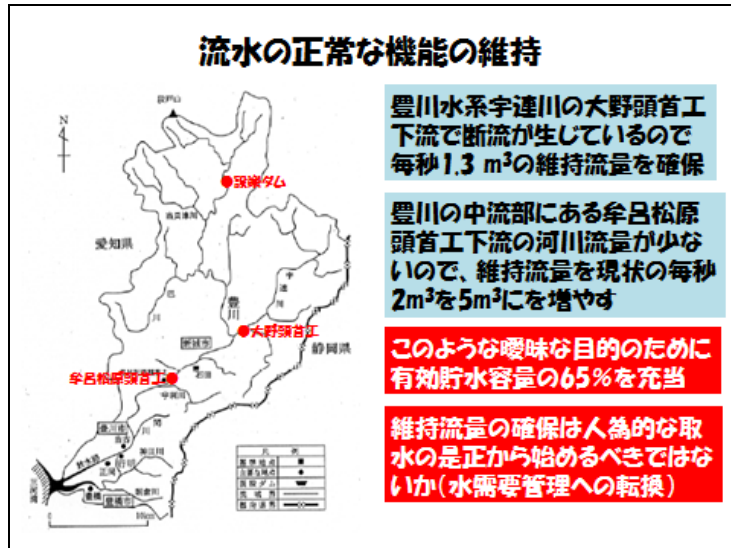
設楽ダムの目的として、①洪水調節、②流水の正常な機能の維持、③新規利水(かんがい用水・水道水)が挙げられているが、きわめて奇異なのは、②が 6000 万 m³ であり、総貯水容量 9800 万 m³ の 61%、有効貯水量 9200 万 m³ の 65%と突出していることである。



25 流水の正常な機能の維持

流水の正常な機能の維持は、昭和 39 年(1964)の河川法の改正で河川管理の目的に加えられたもので、生態系の維持などに必要な流量と既存水利権の流量を確保しようとするものであるが、豊川では人為的な操作により正常な機能の維持ができなくなっているのであり、人為的な操作の適正化がまず必要ではないか。

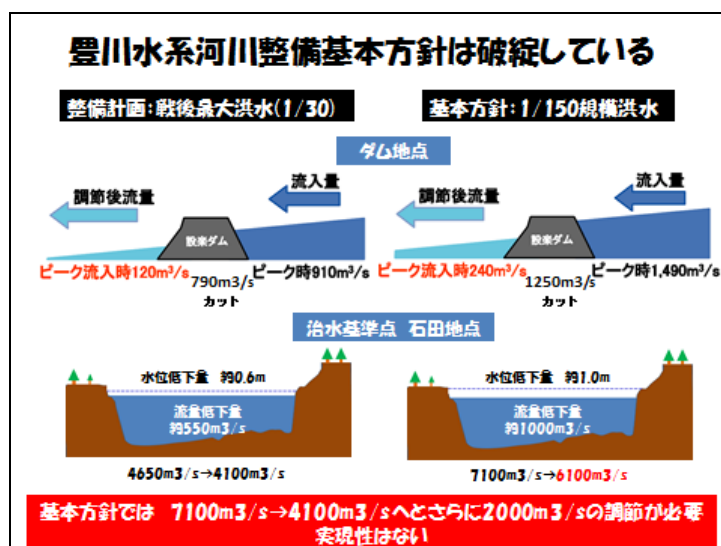
「豊川水系宇連川の大野頭首工下流で断流が生じている」、「豊川の中流部にある牟呂松原頭首工下流の河川流量が少ない」からとって、取水量の見直しや利水システムの見直しをすることなく、流水の正常な機能の維持のために有効貯水容量の 65%を充当するようなダムの建設に走るのは余りにも安易である。



26 豊川水系河川整備基本方針は破綻している

整備計画は、1/30 規模の戦後最大洪水を目標とし、ダム地点の流量 910m³/s のうち 790m³/s をカットして 120m³/s に調節することで、治水基準点石田地点の流量を 4650m³/s から 4100m³/s に調節し、水位を約 0.6m 低下させるとしている。

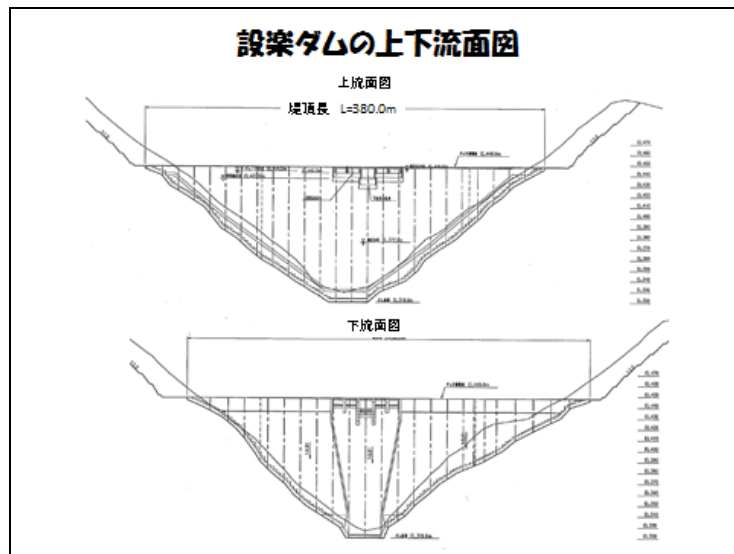
ところが、基本方針では 1/150 規模の洪水を対象としており、ダムで 1490m³/s を 240m³/s へと 1250m³/s カットしても、石田では 7100m³/s が 6100m³/s になるだけで、河道の流下能力 4100m³/s を超えている。ダムがあっても氾濫するのである。氾濫しないようにするにはさらに 2000m³/s の調節が必要であるが、それを可能とするダム地点が存在するとは思えない。基本方針は破綻していると言わざるを得ない。



27 設楽ダム上下流面図

設楽ダムは堤体の天端付近に設けられた下段洪水吐きと上段洪水吐きから放流されるようになっている。多くのダムに見られる放流調節ゲートはなく、ダムの水位によって放流量が定まる自然放流方式となっている。

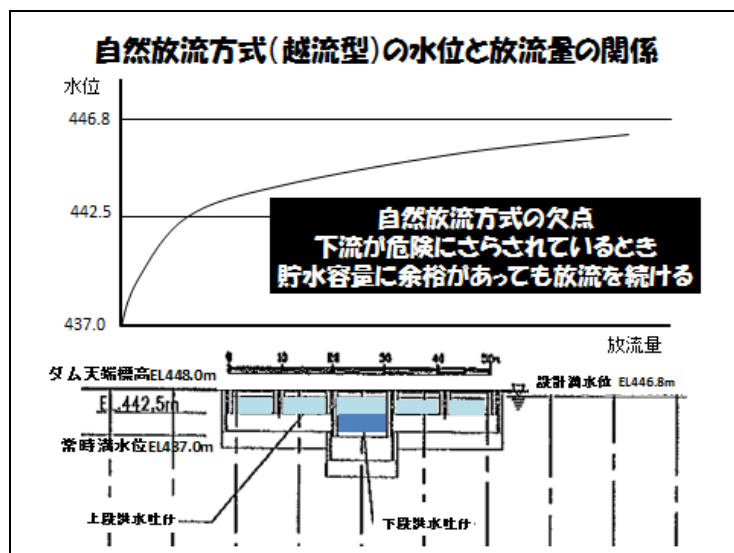
このことは事業者が一般向けに発表している資料には記述されていず、第 31 回豊川の明日を考える流域委員会の議事概要で知った。



28 自然放流方式(越流型)の水位と放流量の関係

設楽ダムでは、貯水池の水位が常時満水位 EL487.0m を超えると幅約 10m の下段洪水吐きから放流されだし、水位が EL442.5m を超えると幅約 50m の上段洪水吐きから放流されるようになる。放流量は貯水池の水位から決まり、人為的な操作はできないようになっている。

このことは、たとえ下流が危険にさらされていて、貯水容量に余裕があっても、放流を続けることを意味し、新潟水害の大谷ダムで見られた自然放流方式の欠点でもある。



29 豊川の明日を考える流域委員会

豊川の明日を考える流域委員会でどのような議論がなされたかを知らうと調べていると、2007年2月16日の東日新聞の「われわれは御用学者か」との記事を見つけた。

何が問題なのかを知らうとしたが、この委員会は、事務局がまとめた議事要旨を公表している

だけで、議事録を公表していない。このため詳細はわからなかったが、議事録を公表しない委員会は「御用委員会」と酷評されても仕方がない。

豊川の明日を考える流域委員会

豊川の明日を考える流域委員会名簿

氏名	役職
加藤 和年	設楽町長
神野 吾郎	豊橋商工会議所 副会頭
番掛 俊夫	愛知大学教授
鈴木 真理子	とよはし女性フォーラム 元会長
鈴木 光夫	「母なる豊川」活用推進委員会委員長
中西 正	成章高等学校 教諭
中村 俊六	豊橋技術科学大学名誉教授
早川 勝	豊橋市長
○藤田 佳久	愛知大学教授
光岡 史郎	(財)愛知・豊川雨水振興協会 相談役
渡邊 啓司	豊川市消防(水防)団 元団長

※○印は委員長 (敬称略、50音順)

**議事要旨だけで
議事録が公開されていない**

東日新聞 2007年2月16日

30 豊川の治水についての私見

設楽ダムは、きわめて限定的な洪水に対して役立つだけで、雨の降り方によってはそれも覚束ない。また、堆砂により長くても数百年で機能を失う。ダムでは住民の生命と財産を守れないのである。さらに、ダムは環境を破壊するという重大な欠陥もある。

住民の生命と財産守る最後の一线は堤防である。越水にも耐える堤防補強をまず実施し、そのうえでダムをどうするか決めればよいのではないか。

豊川の治水

設楽ダムは
 きわめて限定的な洪水に対して役立つだけで
 雨の降り方によってはそれも覚束ない
 堆砂により長くても数百年で機能を失う
 ダムでは住民の生命と財産を守れないのである
 ダムは環境を破壊するという重大な欠陥もある

**住民の生命と財産守る最後の一线は
堤防である**
 越水にも耐える堤防補強をまず実施し
 そのうえでダムをどうするか決めればよい

31 これからの治水について

最後に、これからの治水のあり方について考えよう。

これからの治水について

32 治水理念の変遷

治水の理念は移り変わってきている。治水の3原則は避水・遊水・封水であるが、時代の技術に応じて重点の置き方が変わっている。

古代では稲作のため河川水を利用するができるだけ離れて住むようにして洪水を避けた。

戦国時代に大河川がはじめて治水の対象にされるようになり、代表的な工法として流れのエネルギーを受け流す信玄流と堤防で流れを制御しようとする秀吉流が用いられた。江戸時代になって家康が重用したのは信玄流を汲む伊奈流であるが、吉宗は秀吉流を汲む井沢流も取り入れようとした。近世の河川整備の中心は信玄流および伊奈流であり、大洪水は遊水させている。

近代になって明治政府は欧米の先進技術を取り入れ、当初は舟運のための低水工事が中心であったが、洪水被害が頻発したことにより再度災害を回避する高水工事が中心となった。

この方式では計画を超える洪水が発生すれば壊滅的な被害となる。このため、いかなる規模の洪水に対しても住民の生命と財産とりわけ生命を守るには、洪水を流域全体で受けとめる方式に転換する必要がある。しかし、河川管理者は、ダムをつくることに拘泥し、このことに気がつかないフリをしている。

